

## 「親鸞と現代」第Ⅰ期」第二回

同朋大学教授 田 代 俊 孝

### 聞くということ

今日は「親鸞と現代」という講座ですが、親鸞聖人がおっしゃった大切なお言葉に、「同朋」という言葉があります。これは本学の学名にもなっております。この「同朋」という言葉の意義、それから「共生」という言葉、これも仏教の大事な言葉でございますが、今日はそういったことをテーマにお話しさせていただこうと思います。

私の学生時代、大谷大学の大学院生の頃に、金子大栄という先生がいらっしゃいました。金子先生は「聞思」という言葉を非常に大切にされていました。この「聞思」という言葉は、私たち真宗門徒において、そのあり方を示す言葉でございます。聖道門の仏教は、自力の修行をして目覚めていくんですが、浄土真宗、浄土門の仏教というのは、聞思あるいは聴聞、つまり聞く宗教だと言います。祈る宗教、修行する宗教に対して、浄土真宗は聞く宗教だということです。

ところで、「聞く」ということですが、これがどうも現代人にとって非常に苦手なようです。どうしてかという  
と、現代人はみんな賢くなってしまったんですね。賢い人ほど聞けないんです。「ちゃんと耳はあるよ」と言われ  
るんですが、しかし、聞けない。なぜか。賢い人ほど、「知ってる、知ってる」と言うんです。禅の言葉で「小智  
は菩提の妨げ」という言葉がございます。小賢しい知恵は、悟りの妨げになるんです。「知ってる、知ってる」と  
言えば言う程、聞けない。そこにバリア、壁ができてしまっています。その壁を「バカの壁」と言います。養老孟  
司さんがお書きになった『バカの壁』（岩波新書）の中で「バカの壁」について、こんなふうにおっしゃっていま  
す。

「自分が知りたくないことについては、自主的に情報を遮断してしまっている。ここに壁が存在しています。こ  
れがバカの壁です。ものを知っている、つまり、常識があるということではなく、当たり前のことを指す。ところ  
が、その前提となる常識、当たり前のことについてのスタンスがズレているのに、自分は知っていると思っていしま  
うのは、そもそもの間違いです」。スタンスがズレているんです。往々にして賢い人ほど失敗が多い。思い込みと  
自分なりの知識を振りかざして、「知ってる、知ってる」と言って、聞く耳を持たない。誤解を恐れずに言えば、  
仏教というのは関西の言葉で言えば「アホになる道」なんです。こんなことを言うと言われそうですが、くれぐれ  
も誤解しないでください。「知ってる、知ってる」と言うんではなくて、アホになるところに聞く耳が開けてくる  
んです。現代社会の価値観を振りかざす人ほど、アホになれない。

ところが、高僧といわれる人は、みんな「自分はアホだ」と言っているんです。比叡山を開かれた最澄は、「愚

が中の極愚、狂が中の極狂、塵禿<sup>じんとく</sup>の有情、底下の最澄」「《入山願文》」と言いました。「愚が中の極愚」、つまり愚か者の極まりだとおっしゃっているのです。あるいは恵心僧都（源信）は、「予が如き頑魯<sup>がんろ</sup>の者」とおっしゃっています。「頑魯」とは愚か者という意味です。法然上人は「愚痴の法然房、十惡の法然房」とおっしゃっています。言うまでもなく、親鸞聖人は「愚禿親鸞」です。良寛さんは「大愚良寛」です。仏法に照らされれば、「自分は何かで愚か者だったんだろう」と知らされてくるんです。だから、仏法に出遇っていくということは、愚かであることを自覚していくことなんです。愚かであるがゆえに、聞く耳ができてくるわけです。そういう聞く耳ができますと、あらゆるものから教えられてくるんです。

『仏説阿彌陀經』というお経の中に、「恒河沙数諸仏」という言葉が何度も出てまいります。「恒河」というのは、ガンジス川です。「ガンジス川の砂の如くの諸仏がいらっしゃる」というんです。東・南・西・北・上・下の六方に。ところが、聞く耳がないと、バカの壁を作ってしまう、その諸仏の声が聞こえないのです。聞く耳があったら諸仏の声が聞こえるわけです。しかしながら、現代人は賢くなって、バカの壁を作って、さらに耳を塞いでしまっているわけです。そう考えますと、人間は進歩しているのか、逆に後退しているのか、分からない世の中になってきているのですね。

聞くということができない。それを『涅槃經』の言葉で「聞不具足」と言っています。親鸞聖人も『教行信証』に引用されています。

如來の所説は十二部經なり。ただ六部を信じて、未だ六部を信ぜず。このゆえに名づけて「聞不具足」とす。

(中略) またこの六部の経を受け已りて、論議のためのゆえに、勝他のためのゆえに、利養のためのゆえに、諸有のためのゆえに、持読誦説せん。このゆえに名づけて「聞不具足」とす。

「十二部経」というのは、十二部あるという意味ではなくて、十二通りの説き方がしてあるという意味です。だから十二部経というのですが、半分を信じて半分の信じない。あるいは議論するためにお経を読む。論争で相手に勝つために、あるいは修行で相手に勝つために仏教を勉強する。あるいは利益を得るために仏教を勉強するとか、仏教を勉強して何かいいことがあるとか、そういうふうな「何々のために、何々のために」と思っているわけです。まさにそれは聞く耳を持っていないのです。

たとえば、今日のようなお話をした後に、ご感想をお聞きますと、「今日のお話はためになりました」とおっしゃる方がいます。でも、私は、ためにしてもらうためにしゃべっているのではないんです。仏教をそんなふう聞いてもらったら困るんです。「法に照らして自己を問う」、このように聞くことによって自己を学んでいくんです。「何々のために」という形で聞く限り、仏教を聞いたことにはならないんです。

## 「いのち」と「生命」

「いのち」という問題も、現代人は分からないようになってきました。世の中で「いのち」といったら、一般に「生命」と書くいのちでしょう。DNAがどうか、身体の構造がどうなっていると、こういう世界の話です。

これが現代人のいのち観です。いのちといえば、細胞がどうなっていて、遺伝子がどうなっていて、構造がどうなっていて、というわけでしょう。これで「いのちが分かった」と言うんでしょう。そういう価値観です。何かスタンスがズレていないですか。スタンスがズレているのに、「分かった、分かった」って言うんでしょう。まさにバカの壁です。

養老孟司さんの書いたものに、『養老孟司の逆さメガネ』（PHP新書）という本があります。世の中が逆さまに見える眼鏡です。それをかけると天と地がひっくり返って、じっとしておれんと思うでしょう。ところが慣れてきたら、何ともないですよ。ひょっとしたら、私たちがこういうふうには認知しているだけで、本当は逆さかもしれないのです。科学の場合は、すべてを实在するモノとして見ていきます。有るか無いかとか、ということになります。そして、すべてを分析して数値化していくんです。そして、右肩上がりに引き延ばしていくことを「成長」といふんです。

だから、いのちも生命という見方で見ると。現代社会では科学の眼で見ていくわけです。いのちを数値化していったらどうなりますか。年齢になりますよね。それを右肩上がりに引き延ばしていくと幸福だという考え方でしょう。ですから、昔こんなスローガンがありましたよね。「豊かな長寿社会を！」。それで、みなさん長寿になりましたが、豊かになりましたか。ちっともなっていないでしょう。長寿になったら豊かになるとかいても、幻想ですよ。百歳まで生きても、「私は百五十歳まで生きるつもりだったのに、百歳で死ぬのは不本意だ。こんなはずではなかった」と言っている、死んでいかなければならない。かつて「人生五十年」と言いました。今は「人生八十年」。伸びた

分だけ満足していますか。ちっともしていないでしょう。「まだまだ」と思っているでしょう。

だから、そういう科学的な価値観、科学の見方でのちを見て「分かった、分かった」と言っているけれども、実際は分かっていたいなかったんです。「科学は絶対だ」「科学的方法論じゃないと信用できん」と言ってきたわけです。宗教学や仏教学や真宗学も、科学的方法論で、文献がどうか、教義構造がどうか、自分抜きで研究していったならば、それで仏教が分かったかといえば、全然分かっていないですよ。もっと言えば、それは本来の仏教ではありません。

たとえば「涙」について、水と塩分とリンでできているというだけではなくて、やはり涙というのは嬉しい時、悲しい時、怒った時、そういう情緒的な意味合いがあります。いのちも、漢字で「生命」と書くのに対して、ひらがなで「いのち」と書く場合があります。そこにどういう意味が込められているかといえば、少なくとも科学的な見方ではないですね。情緒的な部分もあるでしょう。あるいは宗教的な意味合いもあるでしょう。そういう価値観といえますか、ものの見方が問われています。

### 中道と縁起

科学的な価値観というのは、二極論になるわけです。二極論というのは、有るとか無いとか、有無の二極論になるわけです。しかし、仏教には別の価値観があるんです。それは「中道」という考え方です。「中道」というと

「真ん中の道」と書きますから、イエスカノーかの真ん中の道、プラスかマイナスかの真ん中の道と思うでしょう。違うんです。親鸞聖人は、それを「有無をはなる」(『浄土和讃』)という言い方をされています。「悉能摧破有無見(ことごとく、よく有無の見を摧破せん)」「(正信偈)」。有るとか無いとかという見方だけではない。

いのちの問題でいえば、生はプラス、死はマイナスというふうにみなさん思うでしょう。死はマイナスというから、死が敗北になるんです。では若くして亡くなった人はみんなダメなんですか。そういう話になりますよね。良いとか悪いとか、誰が決めたんですか。自分の都合で善し悪しを決めているだけですよね。仏教には、そういうとらわれを離れるという立場があるのです。プラスでもマイナスでもない、とらわれを離れる。長いとか短いとか、良いとか悪いとかというモノサシを離れる。有無を離れる。

そのとらわれを離れたら、私たちはもともと、自分の思いを超えた大きな働きの中にいると気づけるのです。仏教の存在論というのは「縁起」なんです。「空」なんです。みなさんがここにいらっしゃるのも、ご縁なんです。みなさんがいくら頑張ってみても、思い通りになりません。大体、この世に生まれてきたこと自体がご縁ですから。頑張ってみても自分の思い通りにならない。思いがけないということ。これが仏教の存在論です。そして空というのは、空っぽという意味ではありません。考えてみたら不思議です。「自分のいのちは自分のものだ」という科学的な見方をしているから、自分のものになってしまっているのです。自分の所有物なら、自分の思い通りになるはずですね。でも実際は思い通りにならないですよ。親鸞聖人は「善信が身には、臨終の善悪をばもうさず」(『末燈鈔』)とおっしゃっています。とらわれを離れたら逆に楽なんです。

ところが、科学の知だと、自分の思い通りに生命を引き伸ばしたいと思う。だから賢い人ほど苦しまなければならぬのです。賢い人ほど、思い通りにならんものを思い通りにしようと力むし、何とかしたいと思う。しかし、現実にはそうならないから、その狭間で苦しまなければならない。それで、「こんなはずではなかった」と言っていて、死んでいかないといけないのです。ですから、そのとらわれを離れることが、有無を離れるということです。だから、あるがままなんです。そのあるがままを自覚していく道が仏教です。我々の思い込み、「虚妄」<sup>こもつ</sup>に対して、あるがままを「如実」<sup>にじつ</sup>というわけです。仏教というのは、何も難しいこと言っているわけではないのです。苦の原因となっている虚妄、思い込みを取っ払うことが悟りなんです。それが如に出遇っていくこと、「如実知見」です。あるがままを、あるがままに知っていくことなんです。何も難しいことはない。事実そのものを見つめましょうというのが、デス・エデュケーションなんです。

みなさん、『葉っぱのフレディ』という童話をご存知でしょうか。デス・エデュケーションの絵本です。これはレオ・バスカーリアというアメリカ人が書いたんですが、この人はインドを旅行して、東洋の死生観に触れたんです。それで無常ということを絵本にしたんです。どんな内容かというと、フレディとダニエルという擬人化した二人の葉っぱの会話なんです。

フレディが「僕、死ぬのが怖いよ」と言うと、もう一方の葉っぱのダニエルが、「まだ経験していないことは、怖いと思うものだ。でも考えてごらん。世界は変化し続けている。変化しないものは一つもない。春が来て、夏になり、秋になり、葉っぱが緑から紅葉して散る。変化するのは自然なことなんだ。僕たちも変化し続けているんだ。



死ぬということも変わることの一つなんだよ」と答えるんです。生も死もライフサイクルの一つです。留まるものではない。つまり無常ということ。無常、無我、これが事実です。我々は、常ではないものを常だと思っているわけです。

私たちはいつまでも若いと思っていますが、しかし、それは虚妄なんです。鏡を見ればそれが事実、ありのままです。鏡に映っているのが真実なんです。病も一緒です。自分は健康が当たり前だと思っているんです。ところが病気になる、「なんで健康なはずの私が入院しないといけないのか。隣の人は楽しそうに暮らしているのに、私ばかりこんな目に遭って。仏さんは不公平だ」と思うわけです。でも、病んで当たり前なんです。健康が当たり前だと思ったら大間違いです。生身の身体なんですから、病んで当たり前なんです。無常ですから、常に移り変わります。病んで当たり前なんです。

死も同じです。死んで当たり前なんです。私たちは、人は死んでも自分は死なないぐらいに思っていますよね。ところがお釈迦さまは、老いて当たり前、病んで当たり前、死んで当たり前とおっしゃっています。このように気づいたら楽でしょう。死んで当たり前なんです。仏教は何も難しくない。当たり前のことを当たり前だと言っているだけです。ところが我々は、勝手に虚妄を抱いて難しい世の中にしているわけです。

## 「共生」

縁起というのも繋がりですよね。父があり、母があり、祖父があり、祖母があり、連綿と続くいのち、つまり縁起的な存在です。繋がりでです。私だけが単独で存在しているのではないのです。私は無数の繋がりの中にあるんです。実は、縁起から出てきた言葉が「共生」という言葉です。『浄土論』に「普共諸衆生」という言葉があります。あるいは『往生礼讃偈』にも「願共諸衆生」とあります。これが「共生」という言葉の元です。それで、この共生という言葉世の中に最初に知らしめたのが、椎尾弁しいおへんきやう匡先生です。椎尾先生のごことは、みなさんはあまりご存知ないかもしれませんが、この「共生」という言葉を広めたのは黒川紀章さんです。黒川さんはご存知ですよね。愛知県蟹江町の生まれで、出身は東海高校です。実は黒川さんが東海高校に通っている時の校長先生が椎尾先生なんです。

椎尾先生は仏教学者です。のちに大正大学の学長や東京の芝の増上寺の法主にもなっておられます。黒川さんによると、椎尾先生が大正一〇（一九二一）年に『共生の哲学』という本を書いておられます。東海高校は浄土宗の關係学校ですから、仏教の時間があるんですね。それで黒川さんは仏教の時間に、共生の思想を学んでおられました。東海高校卒業後、黒川さんは設計家になったのですが、その頃の世の中は「日本列島改造論」ですから、大きな構造物を造って、自然を破壊して、箱物を造っていくのが近代化だ、進歩だ、発展だと言われた時代でした。そ

ういう時代に黒川さんは、「ちょっと待てよ。僕は椎尾先生から共生という教えを習ったけれども、ちょっと違うんじゃないか」と思ったというのです。それで彼は、世の中が自然を破壊していくのに対して、「共生」という言葉を取りし、理念にして設計をしたわけです。黒川さんに『共生の思想』（徳間書店）という本があります。その中で、椎尾先生の『共生の哲学』を引用して次のように書いてあります。

私どもは、共存の実義を体して共生浄土の成就を念ずるもの。利鈍も強弱も相携えるという考えです。世の中のものすべて周囲との考えを離れて存しない。一切は衆縁によって生ずるものである。万物は相関して成り立っているものである。

「利鈍」というのは賢い人も愚かな人もという意味、「衆縁」というのはたくさんのご縁という意味です。ですから、科学のように個別に存在するという考え方ではなくて、すべてが衆縁によって生ずる。これは仏教の縁起の考え方です。

万物は相関連して成り立っているものである。私共は、この原理に則って一步、一步理想世界を建設していきたいと思う。

共生という考え方の基本は衆縁である。縁というのは関係存在と了解していいです。すべて繋がりの中にあるんだということです。ちなみに黒川紀章さんは、愛知万博の「黒川試案」の中でこう書いておられます。これは『共生の思想』にも出ています。

私、（黒川紀章）は、一九五九年に、時代は機械の時代から生命の時代へ移行するパラダイムと予見した。工

業化社会だ、物質文明、大量生産、普遍性（均質性）、人間中心主義、覇権主義、理性（科学・技術・経済）が重視された時代には、理性が持つ最高の種としての人間が自然を征服し、コントロールするのは当然と考えられた。そして、西欧の文化は世界最高のものと考えられ、西欧文化に近づくことを進歩であり、近代化と考えた。明治以降の日本はまさに、このような意味で、近代化の道一筋に現在まで歩んできた。

今、時代は確実に変化しつつある。情報化社会、精神文化、多様性、個性、人間と自然の共生、人間と他の種との共生、文化のアイデンティティ、異質文化の共生、理性と感性（芸術・文化・創造性）の共生が重視される時代への移行である。共生の時代には、人間が自然をコントロールするのではなく、人間が自然に手を貸すことによって、自然と共生すると同時に、自然の英智からも学ぶことによって、自然と共生するというアジアの思想（共生の思想）も世界的に意味を持つものである。それを私は西欧中心主義の時代、合理的二元論の時代から共生の時代への移行と捉えて、四十年前に共生という言葉を作り、『共生の思想』を出版した。共生の概念と同時に私は「新陳代謝」「リサイクル」「エコロジー」「情報」という概念をこの四十年間、絶えず提唱してきた。これらはすべて、生命の原理の最も重要なキーワードである。

西洋は科学主義です。科学を絶対とする立場です。それで大量生産とか科学技術の進歩が近代化だとしてきました。自然も人間がコントロールするものであると。それに対して黒川さんは、「ちょっと待てよ。高校時代に椎尾先生から「共生」ということを学んだ。共生とは人間がコントロールするのではなくて、人間が自然に手を貸すことによって、自然と共に生きることだ」と。そして、「人もみんな繋がっているんだ」と。衆縁関係、繋がるいの

ちです。縁起という考え方です。

科学の立場で考えると、生命は単独に存在すると考えられています。単独ですから個別主義になる。私は私という考え方です。今、世の中で何が言われているかというとな縁社会、無縁死です。孤独死がもっとエスカレートして無縁死と。繋がりを切っていく。もともと東洋の思想は、特に仏教の立場ですから縁起です。それに対して科学的な見方をすれば、有るとか無いとかです。から個別主義になります。私たちはあまりにも科学が絶対だという価値観の教育を受けてきましたから、そういう個別主義の感覚が非常に強い。ところが、もともと日本社会というのは、繋がりを大事にしてきたんです。「有無の存在論」ではなくて「繋がる存在論」なんです。縦でいえば、父があり、母があり、祖父があり、祖母があり、連綿と続く縁によって私は生まれてきています。横でいえば、私がいるからあなたがいる、あなたがいるから私がいるんです。繋がりによるところの存在論です。それは共生、縁起の法という仏教の思想に基づいているわけです。

そして、この共生にはもう一つ、「平等」という意味があります。仏教でいうところの平等です。西洋の価値観ですと、「人間は万物の霊長だ」と言います。だから人間が一番の最高位であって、そして万物の霊長であるところ、仏教の考え方はそうではない。人間中心主義ではありません。「衆生」という言葉は「あらゆる生きとし生けるもの」という意味ですから、人間だけ指している言葉ではありません。あらゆる生きとし生けるものという見方ですから、まさしく平等という考え方です。

## 「同朋」

それで、その共生という方を包み込む言葉として、「同朋」という言葉があるのです。共に生きるいのちを「同朋」というわけです。「御同朋、御同行」です。「同朋」の「朋」という字は、肉月が二つですから、人が集まっているという意味です。ですから、共に生きるいのちを「同朋」というのです。民族が同じという場合は「同胞」を使います。これは民族という括りくくりなんです。あるいは、何か特殊な一つの括りがあるという言葉です。しかし、同朋は「普共諸衆生」という意味です。

「共に生きる」とか「共なるいのち」というと、なんだか格好良く、良い部分だけが見えてくるんですが、これに対応する言葉に、「共業ぐうごう」があります。これも大事な考え方です。業を共にする。業を共にするとはどういうことかと言いますと、共なる罪業を自覚していくことだと言い換えても良いですね。

共なる罪業とは何かと言いますと、ちょっと具体的な話ですが、私がこの大学へ勤めた頃、朝日カルチャーセンターの講師を務めておりました。しばらくして、「海外の仏蹟に行って、現地講座をやってください」と言うので、中国の玄中寺や香積寺など、善導大師や曇鸞大師の御旧跡を巡り、現地で解説していたんです。それで、朝日カルチャーセンターの人たちですから、朝日新聞の旗を持って行くわけです。その旗が戦時中の旭日旗に見えるわけです。現地の方は昔の軍隊を思い出して、厳しい眼差しがあったんですね。私は昭和二七（一九五二）年生まれ、戦

後の生まれです。しかし、「戦後生まれだから、そんなことは知らん」とは言えない。やはり日本人として、業と共にしていかなければならない。私もその鋭い眼差しをきちんと受け止めていかなければならないのです。

ですから、今回の原発事故でも、東電の事件だとか、誰々が悪いという話ではないわけです。やはり我々も原発を容認してきたという罪を感じなければならない。被害者意識で、「東電が悪い」「国が悪い」と言うだけではなく、そういうものを容認してきた責任があるわけです。やはり業を背負っていかなければならない。では業を背負ったら何をするか。それが今、立ち上がることなんです。原発を批判するのではなくて、業を感じたのなら、電力の三割は原発ですから、三割カットぐらいは自分でしなければならない。業を共にしたら、みんな立ち上がっていくわけです。

先ほどから申しているように、仏教というのは繋がります。縁起の理法、繋がるいのち、共に生きるいのちであります。と同時に、共業ということも考えていかなければならない。私たちは共に業を背負い、共に喜び、共に悲しみの涙を流す。これが仏教の世界です。ところが、やもすると仏教というのは、自分の心だけということに陥りやすい。仏法はたしかに主体的には「一人一人のしのぎ」ですが、「共発金剛心」「普共諸衆生」です。あるいは「一切衆生」とか「同発菩提心」です。「共に」という言葉が仏教にはたくさん出てきます。個人の胸の内だけの問題ではありません。

浄土真宗では二種深信と言いまして、自己を問うことを強く言います。

自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと信ず。

私は愚かな凡夫であるということを自覚していく仏教です。だから人に言うよりも、自分はどんなんだということが厳しく問われる仏教です。そういうことを言われますと、何か自分の胸の内だけというふうに捉えがちなんです。が、「自身」というのは、単に私だけを問うている言葉ではないんです。『歎異抄』に、

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。

という言葉がありますが、「親鸞一人がため」というのも、親鸞だけという話ではない。Aさんも私、Bさんも私、Cさんも私、Dさんも私というように、主体的に問えという意味なんです。

ところが、その言葉を誤解して、私のためだけの仏教だという解釈をしてしまう人がいるんです。そうではない。なぜならば、弥陀の五劫思惟の願は十方衆生を照らしている本願ですから、誰にでも届いているのです。けれども、それを主体的に私の身の上に問うていくという意味で、親鸞は「親鸞一人」と言っているわけです。その「一人」というのは、全人類を担った「一人」なんです。それと同じように、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」という私は、主体的に自分を問う言葉であり、また共業というような、共に犯している罪を受け止めていきなさいという意味合いがあります。原発というのは、やはり我々も容認してきた罪がある。

仏教というのは、西洋の価値観による二者択一 の存在論ではなく、縁起という繋がりに立つ存在論です。その存在論というのは、共なるいのちを生きる同朋、あるいは共に罪を感じていく共業、こういったことが根底にあります。そういう意味では、私たち自身が苦悩を共有して、共に涙を流せるような活動をしなれないと思いません。仏教の思想の中にも、そういうことがきちんとあるわけです。



今回の東日本大震災も、私たちに何ができるかということ、忸怩たる思いを持ちながら悩んでいる間に、日々が過ぎてしまっています。阪神淡路大震災の時には、社会福祉学部が中心に「何かしたい」ということで、難波別院の地下を借りて、約三十日ぐらいますが、西宮の福祉施設のボランティアをやらせていただいたことがあります。今回の震災については、大きなことはできないままに来てしまっています。そうした時に仏教学科で、さやかですが、こういう催しをさせていただくことになりました。ご参加のみなさんには、ご協力していただいて本当に感謝しております。これからが正念場だと思っています。

今日はどうもありがとうございました。

付…田代俊孝著『ひと・ほとけ・いのち―「非科学」のいのち論』（自照社出版、二〇一〇年）参照。

（二〇一二年七月二八日）